

- 第1章 序論
 第2章 稲麦・養蚕経営の展開と時期区分
 第3章 明治中期における養蚕+座繰り形態の経営・技術構造——近代養蚕法の確立過程
 第4章 大正末期・昭和初期以降の集約複合経営(稲麦・三蚕期養蚕)確立期の経営・技術構造
 第5章 稲麦・養蚕複合経営における各部門技術の特徴
 第6章 稲麦・養蚕複合経営の地域別個別経営の事例分析
 第7章 歴史的分析の要約と現状分析・展望論との結節点

序論では、まず本研究の目的として、昭和40年代の半ばごろまで、群馬県農業の主要形態であった稲麦・養蚕複合経営を、当地域の農業経営の原型としてとらえ、その歴史的展開過程を、生産力視点から考察することが示される。そして、明治期以降の稲麦・養蚕複合経営の経営方式の展開には4つの時期区分、すなわち、第I期、幕末から明治初期(明治19年まで)、第II期、明治中期(明治20~39年まで)、第III期、明治末期から大正中期(明治40~大正9年まで)、第IV期、大正末期・昭和初期以降(大正10年以降)が可能であるとされ、第II期と第IV期に生産力の躍進がみられるとする。

第2章では、第1章で示された各時期ごとの農業経営方式および技術の構造と特徴ならびに組合製糸の展開がまとめられている。

第I期の経営の特色は、小養蚕経営・製糸(座繰り)+水稻(湿田多い)+ a (a : 畑裏作大麦・小麦+畑表作豆類・雑穀・芋類等)であり、養蚕飼育法としては、輸出蚕種生産に適した「清涼育」が普及した。

第II期の特色は、養蚕(春蚕中心)+座繰り(組合製糸)+水稻(晩生種)+水田裏作麦(大麦)+ a である。この時期には、養蚕・製糸業が著しく発展し、組合製糸の誕生と躍進がみられ、篤農家・養蚕家が大いに活躍し、近代養蚕法(「清温育」に代表される「折衷育」)の確立がみられる。そして、普通畑の桑園化が急速に進行し、普通畑を追われた大麦が、水田裏作に作付けられるようになる。

第III期の特色は、養蚕(春蚕>夏秋蚕)+水稻(安全中性種)+水田裏作麦(大麦)、もしくは、養蚕(春蚕>夏秋蚕)・座繰り製糸(一部農家)+水稻(安全中性種)+水田裏作麦(大麦中心)である。この時期、組

田中修

『稲麦・養蚕複合経営の史的展開』

日本経済評論社 1990.9 x+282 ページ

養蚕、製糸業が戦前の日本経済に果たした役割の大きさは、改めて述べるまでもなく、長野、群馬、福島県などの、主要蚕糸業地域の研究の重要性も改めて強調する必要はないであろう。そのため、主要蚕糸業地域の養蚕、製糸業に関しては、戦前戦後を通じておびただしい研究が蓄積されてきた。本書が、研究対象とする群馬県に関しても、大著「群馬県蚕糸業史」をはじめ、養蚕、製糸業に関する研究書・論文は枚挙にいとまない。しかし、従来の研究の多くは、養蚕、製糸業の個別産業の分析を目的としており、群馬県の農業全体の動向を主穀生産を視野に入れて分析したものではなかった。本書は、地域農業の特色を明らかにするという視点から、養蚕業の分析を主軸としつつも、それと稲麦作との結合関係を重視し、複合経営という見方から近代の群馬農業を論じており、その点に最大の特色があるといえる。

以下本書の構成を示すとともに、内容を簡単に紹介してみよう。

合製糸は刷新され、器械製糸へと転換を図ろうとするが、停滞的狀況が続く。養蚕も停滞的であるが、蚕種冷蔵技術が確立され秋蚕が可能となる。麦作では、大麦が次第に減少し、小麦が水田裏作を中心に増大する。

第IV期の特色は、三蚕期養蚕(春蚕+初秋蚕+晩秋蚕)+水稲(晩生種)+水田裏作麦(小麦中心)+ α である。組合製糸は、座繰りから器械製糸へと変質を遂げ、製糸工程は農民から完全に分離される。養蚕では集約的な三蚕期養蚕経営(春蚕、初秋蚕、晩秋蚕)が確立し、稲・麦作における技術改良もみられ、稲麦作の高生産力地域へと到達し、高度に集約的な複合経営が確立される。

以上の第1, 2章は、本書全体の総論部分である。続く第3章では、第1の生産力の躍進期である第II期の技術構造の分析として近代養蚕法の確立過程、すなわち、田島弥平の「清涼育」から高山社の「清温育」への転換の過程が検討される。第4, 5章では、第2の生産力の躍進期である第IV期の経営・技術構造の分析が行なわれており、記述の質・量の両面から本書の中核部分である。ここでは、稲作、麦作、養蚕ごとに、生産力、栽培(飼育)技術、労働手段体系、土地利用体系が詳細に検討されるとともに、各経営部門間の労働配分、地力維持機構における結合関係が分析される。紙面の制約から、個々の技術上の具体的な検討結果を述べることはできないが、各部門の技術の発展と相互の有機的な結合の結果、昭和10年代に生産力はピークに達し、高度に集約的な小農の経営方式が確立したとする。第6章は、前章で明らかにした第IV期の経営・技術構造を、個別経営のレベルにおいて実証した部分である。ここでは、当時期の生産主体とされる自小作農が、西毛地域、中毛地域からそれぞれ2事例ずつ、東毛地域から1事例選ばれ、分析されている。結論部分の第7章では、全体の要約とともに、明治期以降の複合経営の展開は、地主制下における小農経営の自立化に向けた、経営方式及び技術構造の集約的発展過程として把握できるとしている。また、群馬農業の現状分析と、将来への若干の展望も示されているが、本書においては、付論的な部分であろう。

以上のように本書は、多元的視点から地域農業の発展過程を論述しているため、内容は複雑多岐にわたるが、著者の学位請求論文がまとめられたものであり、構成は整然とし、論理も一貫しており、研究のまとめ方の面で学ぶべき点が多い。しかし、本書

の最も優れた点は技術構造の分析にある。とくに昭和初期に展開した、稲作、麦作、養蚕の各部門の技術導入が、栽培時期、労働配分の面で相互に密接に関係し、高度な集約的経営を実現させたことを明らかにしている部分は実に見事である。また、著者も指摘しているように、従来の地域農業の生産技術の研究は、水田農業を中心としており、畑作農業に関する研究はきわめて乏しい。そのため、本書の麦作技術の分析は極めて貴重なものであろう。そのほか、時期区分の設定など教えられる点が多いが、書評ゆえ、いくつか問題点を述べてみよう。

まず最も大きな問題は、農業生産の担い手(生産主体)の分析記述が極めて手薄なことである。著者の生産力視点とは、各時代の技術構造と生産主体を明らかにすることであるが、本書は技術構造の分析記述が大部分を占めており、生産主体については、既存の見解がまとめられ追認されている程度である。すなわち、明治中期の手作り地主および自作上層農から、大正末期以降の自小作・中層農への移行であるが、もう少し詳細な検討が欲しいところである。同じことは、年雇経営から家族経営への転換の問題についてもいえ、また、家族経営への移行をもたらした外部条件(労働市場の変化)についての検討も必要であろう。

明治中期以降の群馬農業においては、水田二毛作が大きな特色とされ、養蚕+水稲+水田裏作麦+ α が基本形態であるとされるが、そもそも群馬県では、水田二毛作率は各時期にどのくらいであったのだろうか。不思議なことにそれについては、全くデータが示されていない。水田二毛作が活発に行なわれてきたという文章記述があるのみである。水田二毛作率については、直接的なデータが得られ難いということが原因と思われるが、麦類の水田への作付面積などから推定は可能であろう。(県統計書から評者が試算したところによると、明治41年における群馬県の水田二毛作率は58%である。)

畜産(養鶏、養豚、乳牛飼育)については、本書では、第4章で、簡単な記述があるのみであるが、第6章の個別経営の分析では、その重要性が浮かび上がってきている。論の展開としては、第4, 5章の内容を確認、深化すべき第6章において新たな問題が提起される形になっており、やや意外な印象を受ける。個別経営の分析からすると、著者も結論で指摘するように、昭和初期以降の群馬農業は、それまでの養蚕偏重から、稲麦作や畜産を重要視した複合的

有畜経営への転換が進められたとみるべきであろう。そうすると、第IV期の経営方式は、養蚕＋水稲＋水田裏作麦＋ α (普通畑作)に畜産を加え把握するべきであり、畜産部門についての経営・技術構造の分析も、第5章において示されるべきではないかと思われる。

また、個別経営の分析では、資料としては主に、帝国農会が調査した「農業経営調査」や、群馬県農会が調査した3種類の経営調査書などが用いられているが、これらの資料の意味づけが行なわれていない点、気にかかる点である。各種農会が調査した農家は、各地域の標準的な事例であるといえるだろうか。実際は、著者が用いている群馬県農会の資料も名称が「優良農家の農業経営法」、「充実セル農業経営ノ実績」とあるように、調査農家は各地域の模範的な優良農家である場合が多い。そうすると、そのような事例農家の分析から導きだされる事実は何を意味しているのか、あるいは何が導きだせるのかが吟味される必要があろう。

以上いくつか意見を述べたが、これらは本書の価値を損なうものではない。本書は近代の群馬農業の通史としての役割を果たすものでもあるため、群馬県の産業経済に関心のある研究者には必読書であろう。のみならず、本書で提示された稲麦・養蚕複合経営の分析視点は、戦前に養蚕が盛んであった地域に広く適応可能であり、他地域の農業史研究者にとっても示唆するところが多い好著といえる。

[中西僚太郎]